

豊中ロータリークラブ教育フォーラム「何でもしゃべれる道德の時間」を終えて

畑田耕一 北山辰樹 井上暎夫 久保田拓鑑 渋谷亘 矢野富美子

豊中ロータリークラブ(RC)教育フォーラムではここ数年、道德と教育の問題をいろいろな観点から話し合ってきた。

第1回(2016年)は「小・中学校の道德の授業の特別の教科化を考える」(参考文献1)、

第2回(2017年)は「学校教育における道德を考える」(参考文献2)、

第3回(2018年)は「日本社会と道德」(参考文献3)、

第4回(2019年)は「AIと教育—道德と四つのテストに照らして」(参考文献4)である。

今回は、2020年1月25日(土)13:30~17:00にホテルアイボリー「櫃の間」で、過去の道德関係のフォーラムの一つのまとめとして、「何でもしゃべれる道德の時間」というタイトルでフォーラムを行った。出席者は文末に記した通り、大学、高校などの現あるいは元教職員ならびに高校生(5名)、大学名誉教授、留学生とその関係教職員、市教委職員等外部からの参加者22名、豊中ロータリークラブの会員12名、国際ロータリー2660地区パストガバナー1名の総計35名であった。

目次

1 はじめに	2
2 AI とは何か	2
2.1 AI の分類とそれぞれの内容説明	2
2.2 大量のデータ分析と AI への展開	3
3 道德を楽しもう	4
3.1 道德の根源の力は想像力	4
3.2 学校の授業と道德—授業評価の問題も含めて	5
3.3 戦中教育から戦後教育への転換と最近の学習指導要領改訂	7
3.4 日本は神仏分離の国で戦前の昭和天皇は神であると教えられた	9
4 道德の本質を考える—企業活動と教育活動を通して—	10
4.1 道德って何? その答えは	10
4.2 これからの企業道德—企業は社会に対して如何に道德的であるべきか	10
4.3 大人の道德の基礎となる子供の道德と子育て	11
4.4 学校教育と道德	12
4.5 広範囲の知識・経験をもって時代を担う若者の養成	13
4.6 親と子供の対話	13
5 社会における道德的能力の養成	14
6 フォーラムを終えるに当たって	15
7 終わりに	19
8 参考文献	19
2020年1月25日教育フォーラム参加者	20

1 はじめに

最初に、松山辰男豊中 RC 会長から「本年は過去 4 回の道徳と教育に関わる討論の総括に当たる大事なフォーラムなので熱心で緻密な話し合いを願っています」との挨拶があり、次いで井上暎夫国際ロータリー 2660 地区パストガバナーの「私も松山会長と同じようなことを思っています。特に、今日は教育現場ではあまり言えないようなことも言えるような雰囲気です。期待しているところです」との力強い発言で会が始まった。

次に司会の畑田耕一より、「今日はこれまでのフォーラムと違って道徳と教育に関わることであれば何を言ったり議論したりしていただいても結構です。勿論、これまでのフォーラムで言い足りなかったこと、議論したかったのに時間が無くて出来なかったことを持ち出していただくのも結構です。前回の『AI と教育』のフォーラムには不完全燃焼の部分があったような気がします。人が生きていくうえで道徳あるいは教育と全く無関係というようなことはそんなに多くはないので、日常生活のあらゆる面を道徳的・教育的に考えて話し合っただけであれば幸いです。これまでのフォーラムでは全く考慮されていなかった観点からの議論も沢山出て、その集約が道徳の本質に迫り、小・中・高等学校・大学の先生方、そして多くの一般市民のお役に立てる纏まった結論の出せるフォーラムになることを期待しております」との挨拶があった後、今日のフォーラムが前 4 回のフォーラムの総括としての役割を果たすための突破口として前回のフォーラム「AI と教育」の不完全燃焼部を完全燃焼させることを願って「AI とは何か」について次のようになり詳しい説明がなされた。

2 AI とは何か

2.1 AI の分類とそれぞれの内容説明

AI とは Artificial Intelligence の略号で、人工知能のことである。AI には**弱い AI** と **強い AI** がある。弱い AI は、限られた問題について人間の知能の一部を代替して解決できる、例えば囲碁 AI のように特定の決まった作業を遂行するための、**特化型 AI** と、特定の作業・仕事に限定せず人間と同様の、あるいは人間以上の汎化能力を持ち合わせている**汎用型 AI** に分類することができる。また、強い AI とは、脳科学などを取り入れながら人間の知能や心の原理を解明し、人間の脳機能と同等の汎用的な知的処理が実現可能なものを言い、人間のように自意識や感情を持ち合わせているもの、例えば「鉄腕アトム」や「ドラえもん」がこれに当たる。現在存在するのは特化型 AI のみで、汎用型 AI は出現するとしても 50 年後、強い AI に至っては出来ても 200 年先と言われている。

特化型 AI に限っていえば、AI が人間に代わって行う仕事が増え続けて、「数年後にはあなたの職業はなくなりますよ」というようなことが言われ始めている。例えば、医療ロボットがどんどん進歩すると外科医が不要になるとか、学校の先生の仕事の大部分が AI に置き換えられるというような話である。しかしながら、つまるところ、どんな仕事も入り口と出口はやはり人間が関わらなくてはならない。特化型 AI を作るのは人間であり、データを入れるのも人間、人間の行動・考え・行いが AI に反映するというのが一番重要なポイントである。そして、最後に人間は AI を道具として作ったというところに立ち返って、人間の AI に対する役割を突き詰めていかねばならない。人間が始めたことなので、その開発や利用・活用も人間がやらねばならないし、どのようにして人間が AI と共生していくのか、という原則も作らねばならない。これらを考えるのは全て人間であるし、小学校上級あたりの生徒へのそのための教育も人間の仕事として必要になってくる。

AI が日常的に使われるようになって、理工系を志望する学生が多くなったと聞く。自分らの出番が増え

たことを自覚してのことであろう。AIの開発・利用は理工系の人間の仕事であろうが、AIの内容は理工系だけではなくあらゆる分野に関わっている。理工系の学生も「哲学なんて何のためにやるのか」というようなことは夢思わずに、理工系の学生であるが哲学の根本にも精通しており文学をも嗜み且つ3か国語ぐらいは使えるという多様性のある人間に育って欲しいと思う。それが新しい日本そして世界の発展のためである。自分の専門だけに片寄った教育・学習は通用しない時代が近づいていることを忘れないで欲しい。

ノーベル賞受賞者の先生方が、「一見何の役に立つのか分からないような基礎的な研究をこつこつと続けることが学問の大きな発展のためには非常に大事なことです。基礎的な研究をしている人たちは、何のために、何に役立つかは分からないけれども、とにかく真理を求めて研究を続けている、そういう一見無駄に見えるかもしれないような場が人間の教育には必要なのです」という意味のことを、よく言われるように思う。AIもまたこのような場から生み出された技術の一つなのだとすることを一般市民の方々はよく理解していただきたいと思う。

軍事へのAIの活用は倫理的に大きな問題を含んでいる。AI活用の無人兵器なら人よりも強い防弾性能を備えられて大規模な殺害が可能になるうえに、たとえ敵に倒されても人の命が奪われることはない。使い手の人間がどのような倫理観をもって活用するかが問題になる。2019年3月にスイスでAI兵器の規制に関する国際会議が実施されたが、AIの軍事利用に関する各国の思惑が一致せず議論が難航したという。

(参考文献5) 今後、最も問われるAIの一つは軍事領域活用のもつと言えるかもしれない。

ここで強いAIについて一言述べておきたい。これは先にも述べたように鉄腕アトムやドラえもんのように人格のあるロボットで代表されるAIである。鉄腕アトムやドラえもんは、現在正義の味方としてわれわれに接し、受け入れられているが、これがそうではない反対の方向すなわち非道徳的な方向に行動する可能性が否定できず、汎用型AIとともにその誕生は阻止した方がよいというのが、今日の参会者の大方の意見であった。AIに限らず科学に関わる人間は道徳的に考え行動することがその責務であり使命であることをあらためて強調しておきたい。

なお、特化型AIにも人間に似た体の動きや姿かたちではないが、人の言葉を正しく認識してそれに反応し答えを返す機能をもつAIロボットがある。しかしこのロボットは、鉄腕アトムやドラえもんのように人格を持たないので、それにかかわる人間が非道徳的でない限り強いAIや汎用型AIのように危険な行動に出ることはあり得ない。

ここにきて「AIとは何か」について明確に答えることの難しさを再認識された方も多岐かもしれないが、それでは議論が進めにくいので、先ずAI(人工知能)については一般社団法人・人工知能学会設立趣意書に書かれている「大量の知識データに対して、高度な推論を的確に行うことを目指したもの」を採用することとしたい。(参考文献6)

2.2 大量のデータ分析とAIへの展開

大量のデータを分析する際には、統計分析の他に、機械学習や深層学習という手法を用いることにより、さらに踏み込んだ分析が可能になる。機械学習は、従来人が得意としていた物体の認識や事柄のグループ分けなどの作業を機械で実現させる技術で、与えられた大量の情報をもとに学習し自律的に法則やルールを見つけ出す手法である。

深層学習(Deep Learning)は、機械学習を発展させた手法で、主に人間の神経系の挙動を模して学習できるようにデザインされたものである。十分なデータ量があれば、人間の力なしに機械が自動的にデータから特徴を抽出してくれる。例えば、メール情報を大量に学習させることで、迷惑メールかどうかの判別

が自動的にできるし、たくさんの人の顔が写っている画像を学習させることにより、画像中の特定の顔の認識が可能になる。

深層学習は、このように人間の脳神経回路をモデルにした多層構造のアルゴリズムを用いた手法であり、深層学習の中で、人間なみ、あるいはそれ以上の性能を発揮できるものがAI(人工知能)と呼ばれるようになったのである。AIは現在いろいろな分野に応用され、適用範囲が広がりつつある。AIはまさにコンピューター上に人間と同様の知能を人工的に実現させる試みであり、コンピューターが人間と同様に学習しその知識をもとに推測するのである。一番適用例が多いのが、囲碁を始めとするボードゲームやテレビゲームなどで、これらでは何回もプレイを重ねるうちに人間を超える結果を出すようになるという。また、自動車の自動運転の分野でも実験段階で人が運転するより安全な場合もあることが確認されているという。先に述べた、一般社団法人 人工知能学会設立趣意書に「大量の知識データに対して、高度な推論を的確に行うことを目指したもの」と記されているAIの勢力範囲はどんどんと広がっているのである。

機械学習で大量のデータから学習を行う際には、「もし〇〇なら××する」というように人が何を学習するかを予め定義する必要があるが、深層学習では学習する事柄も自分自身で見出して動作してくれる。たとえば深層学習制御の自動運転車では、前方車との車間距離を機械学習制御の場合のように一定ではなく、前方者の速度や周囲の状況に応じて自動的に変更される。言い方を変えれば、機械学習では学習の方向性を人の思い通りに制御し易いが、深層学習では場合によって思わぬ方向に学習が進む可能性があり、最初にどのようなデータを与えるかをよく考え吟味しておく必要があるということを強調して置く。(参考文献7-9)

3 道徳を楽しもう

3.1 道徳の根源の力は想像力

ここまでの文章をお読みいただければ、これからの社会をAIとの関わり無しに生きていくのはほぼ不可能に近いということ、そしてAIに関わる人間は倫理的・道徳的であらねばならないこと、さらには自分の専門の勉強だけで生きていける世界ではなくなってきたことをお分かりいただけたと思う。AIとの関わりが不可避になるこれからの世界では、倫理・道徳の問題を真剣に考えることもまた社会人の義務と位置付けられたということである。文科省が小学校に「道徳」必修科目1単位を作り、道徳の授業をこの科目の中だけではなく全教科の中で行うことを指示したのはまさに「先見の明」というべきであろう。理工系の学生も「哲学なんて何のためにやるのか」というようなことは思わずに、哲学は人生の根本原理を取り扱う学問だからこれ無しに理工系の学問は語れないぐらいの意気込みは持って欲しいと思う。

道徳とは訳の分からない難しいものであるという声は後を絶たない。そういう人たちに問いかけてみたい言葉がある。それは「そんな先入観で道徳を見ないで、一度自分の頭で道徳とは何だろうと考えてみてくださいませんか」である。

この自問自答の答えを出すのを難しいと思う人はいるだろうし、状況が個人、地方、都道府県、国によって異なることもあるだろう。しかしながら、どのような状況の中でも、道徳的能力の基本は、畑田らが述べているように、人間が他の人々や動植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断する能力であることは間違いのないと思う。そのような判断を下すには、人以外の動植物やもののコミュニケーションが出来なければならない。人以外の動植物やものは人間の言葉をしゃべらないので、それらとのコミュニケーションは想像力に頼るしかない。また、社会人として真っ当に生きていくためには、過去に学び、未来を予測することが必要である。そのためには、既に亡くなった人やこれから生まれ

てくる人との想像力を駆使したコミュニケーションも要求されることになる。言葉による対話の可能な人との相互理解にも、想像力を働かさねばならないことがある。さらに、自分以外の人や動植物を含む自然環境には、当然、自国以外の国について配慮しなければならないことも含まれている。このように考えれば、道徳的能力を発揮するための根源の力は想像力であるということになる。生きる力の根源は想像力であるともいえよう。(参考文献 10)

上記の文部科学省の「先見の明」は、道徳の授業を「道徳」必修科目 1 単位の中だけで行うのではなく、他の全ての授業の中にも拡大して実施するよというように言っているのではなく、「道徳の授業もそれ以外の授業もその根本原理はほとんど同じです。だから、道徳以外の授業を一所懸命にやっていたら、生徒たちの道徳レベルの向上にもつながるのです」と言おうとしているのである。もう少し分かりやすく言えば、「道徳を含めてあらゆる授業の根本の力は想像力です。一所懸命勉強して想像力を高めてください」と言っているのである(3.2 および 4.4 節参照)。

想像とは何か。それは事を考えあるいは行うときに、ああでもない、こうでもない、それではどうしようか、といろいろと考え、実行につなぐことである。「道徳的能力の根源の力は想像力」と頭に描くだけで楽しくなってくる。道徳とは訳の分からない難しいものではなくて、議論するのが楽しいものであるという認識をしていただければ、本当に素晴らしいことではないだろうか。

想像力は道徳無しには成り立たない科学分野の根本原理に関わる重要な力でもある。科学では想像力の活用が創造の世界を開いていく。想像力をかきたてるにはどうすればよいのか、倫理・道徳の力に裏打ちされた想像力の養成は常に科学分野に関わる人間に課せられた重要な使命の一つである。そして学校の授業の殆ど全てが想像力の養成を根本原理とするものであると思っている。

3.2 学校の授業と道徳—授業評価の問題も含めて

社会人の想像力をかきたてる、想像力を養わせるのはどうすればよいか。そんなことは特別にしなくても大丈夫という考えが全ての日本人に通用するとは思わない。学校の先生方の使命感と責任感を持った行動が必要である。その前に先生方への文科省や校長先生からの働き掛けもいるのかもしれない。というのは、先に述べた文科省の「先見の明」に対して或る先生が「算数の授業でどうやって道徳を教えるのですか」と言われた、というのを聞いたからである。おそらく、この先生は算数と道徳は想像力を通して繋がっていることにお気づきにならなかったのだらうと思う。折角いろいろな人の努力でできた道徳の授業である。その努力が実ることを願ってやまない。

改正された学習指導要領の中の道徳の特別の教科化の項に述べられている「『答えが一つではない課題に子供たちが道徳的に向き合い、考え、議論する』道徳教育への転換により児童生徒の道徳性を育む」、という若干分りにくい文章も、上記の道徳の定義をもとに、「答えが一つではないと思われる課題に子供たちが真剣に向き合い、考え、議論することを、想像力を駆使して学習させ、児童生徒の道徳的能力の向上につなぐ」と変更すれば少しは分かりやすくなったと思うのであるが、いかがであろうか。

今回の教育フォーラムでは、授業について、道徳に限らず多くの意見が語られた。先生が用事で休まれて授業が休講になり、何となくうれしい気分を味わったという方はかなりおられると思うが、「休講とは怪しからん。授業料を返せ」という怒りの言葉はあまり聞いたことがない。生徒・学生が授業に出ることに何らかの拘束感を味わっていることは間違いない。ただ、生徒・学生の多くは出席すれば必ず単位のもらえる授業を望んでいるとは思えないし、授業内容のほぼ全てが何の努力もなしに理解できる授業も生徒・学生からあまり高く評価されていないように思う。「よく分かる授業が必ずしも良い授業とは思わない、難

解な授業を努力して受けるのは勉強になるし、後年あの授業を受けておいてよかったと痛感することもある」という意見もあった。(参考文献 11)

教える先生の側も自分の授業が生徒・学生にどのように評価されているかは、気になるところである。かなりの学校・大学で教員の授業評価が行われている。その結果が教員の成績評価に使われているところもあるようだが、アンケート結果は教員の自己評価の参考資料にするぐらいに留めておいて、如何にして生徒・学生に勉強をする気を起こさせるかに全力を挙げて欲しいと筆者らは思う。特に、小学校では子どもたちが面白い授業だ、もっと聞いてみたいと思ってくれたらしめたものである。子供に興味を持たせる切っ掛けづくりが大切なのである。授業評価が行われるようになってから先生の授業から多様性が少しずつ消えつつあるという意見があった。本当にそういう傾向が出始めているのなら、対策を講じるというよりは、子供への悪影響が現れる前に授業評価を止めるべきであろう。

授業や小・中学生の生活指導に AI を活用してはどうかという意見もあったが、これには反対意見がかなり多かったように思う。

これはある私立大学での話であるが、学生による授業評価や学生が授業から何を学習しているかを論じる前に、先ず学生の理解力や文章の読解力を十分に把握することが先決であるという話が出た。私学では経営上の問題で学生数を増やすために少々能力の低い学生でも入学させることがある。今、学内に教育センターを作ってそれらの学生をどのように育てていくかを真剣に検討中であるとのことであった。

読解力・理解力は何も生徒・学生だけの問題ではない。一般社会人にとっても、常にその向上に努めねばならない、生きていくうえで必要な能力の一つである。最近「スマホなどで短い文章しか読まなくなって、読解力・理解力が低下しました。もっと論説、小説などの長い文章をいろいろな分野について多く読むことが大事です」という意見が高校生からも出されていた。問題になっている文章に対する読解力や話題に対する理解力はそれを聞く側の経験や知的背景にかなり大きく左右されるということは情報の発信側も受信側も頭に入れておかねばならない重要なことの一つである。特に受信側はどのような文章も発言も十分な知的背景の蓄積があってはじめて完全な理解に到るものであることを肝に銘じて欲しい。

朝日新聞(2020年2月4日)に、公立高校教員の蜷川純雄先生から大学推薦入試を控えた生徒に対する小論文指導に関する次のような記事が投稿されていた。すなわち、練習用に出される時事テーマの定番は環境問題、特にプラスチックゴミの問題だという。生徒たちは判で押したように「プラスチック製品は大変な勢いで増え、リサイクルを担ってきたアジアの国々でのごみ処理も行き詰っている。海に流れ出て、深刻な海洋汚染が指摘される。各国は対策を講じ始めている。私たちも、この世界共通の課題に取り組まなければいけない。まず、レジ袋をもらわない、ポイ捨てをしないなど、一人一人ができることから……」のように書くという。この答案には環境問題に対する知識や独自の視点・考察はなく批判精神や科学的思考が見当たらない。この先生は、これは、これまで学校は、様々な面で、他者を批判すること、問題の核心を突いて論争を起こすことを戒めてきた結果であろうと述べたうえで、変化が激しく予測が困難な社会の到来が叫ばれ、答えのない課題を主体的に学び、考え、表現する力が求められている昨今、「型どおりで当たり障りのない答え」に意味はないと断じておられた。

今回の教育フォーラムでも公立高校の教員が変更された学習指導要領、新高等学校学習指導要領ならびにその文科省によるその解説を詳細に検討したうえでの、高校における授業の現状についての報告がなされた。総合的な探求の授業(参考文献 12)の「課題の発見とその探究ならびに成果の発表・報告」という授業の特徴は教員によく理解されているが、その実施過程については十分な吟味がなされず、重要な課題も見逃されて、かなりの授業がおざなりに行われているのは残念でならない、とのことであった。多くの

熱血教員の出現を期待する以外に方法はないのであろうか。(6章の最後18頁参照)

3.3 戦中教育から戦後教育への転換と最近の学習指導要領改訂

この節では、敗戦による戦中教育から戦後教育への転換に始まり最近の学習指導要領の改訂に至る日本の教育の変遷を、国際ロータリー第2660地区井上暎夫パストガバナーと筆者畑田耕一の小学校時代から現在までの教育との関わりを交えて述べさせていただく。

井上は小学校2年生の夏に終戦を迎えた。ここで教育の内容ががらりと変わるわけであるが、新しい教科書が直ぐにできるはずもなく、既存の教科書の都合の悪いところに墨を塗ったものを使うことになった。これは小学校5年生で終戦を迎えた筆者畑田も同じである。井上は戦前の教育は駄目だと高校まで言われ続けたという。筆者自身にはそんな思いを抱いた経験は殆ど無い。これは、一つには小学校5年と6年の担任の先生が陸軍士官学校上がりの若い熱血漢の先生で非常に熱心な授業をしていただいたのと、中学校は私立大鉄中学校(現在の阪南大学の付属中学校に相当する)で、よく面倒を見ていただいた担任で数学・理科担当の河野計男先生は今から思うと日本の戦前の教育の良い面をしっかりと身につけておられ、それを戦後教育の中で最大限に生かされた先生のお一人であったことによっている。そんな環境の中で筆者は自身が経験した戦後教育を素直に受け入れられたのだと思う。

筆者畑田は子どもの時から細くて体が弱く体操が下手で、体操の授業が嫌いであった。終戦の2年ぐらい前からは体操重視の授業が増えて、戦争中の兵隊として活躍することを目的としたような軽業まがいの技を含む海軍体操(海軍の兵隊さんが軍艦の中でやる体操を小学生向けにアレンジしたもの)の時間が多くなり、ますます体操の授業が嫌になった。たまたま家に來られた小学校の校長先生に母親が「こんな体操ばかりを子供にやらせて勉強をほったらかしていたら日本の将来が駄目になりますよ」とくっつかかり、校長先生は戦争に堪える国民養成のための体操の必要性を説いて、かなり激しく口論していたのを今もはっきり覚えている。でも、あんな議論が戦争中に出来たのは、或る意味幸せなことであったと思う。

そして昭和20年8月15日正午の終戦の詔勅、「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ 非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ 茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク 朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ 其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ ……………」で戦争は終わった。翌日の朝礼で大向栄一校長先生は「本当に残念な負け方をしました」と言われたが、筆者にとっては、敗戦の悲しみよりも、あの海軍体操から解放されたことの喜びの方が大きかった。あの時の解放感と嬉しさ、そして子供ながらも少しは感じていたこれから始まるであろう新しい日本の建設への期待は今も忘れない。

ところで、いま日本の教育は学習指導要領の改訂に伴ってかなり大きく変わろうとしている。終戦の時ほどではないにしても、教育の分野ではかなり大きな改革である。改革には必ずプラス面とマイナス面がある。如何にしてプラス面を最大限に生かしマイナス面が最小限になるように努力するかは、その改革に直接かかわる国民の使命と責任である。こと教育改革においては、教員と子供を持つ親が主になって、次代を担う若者のために、一般市民とともに使命を果たさねばならない。例えば、ゆとり教育は、詰め込み教育と言われる知識量偏重型の教育方針を是正し、思考力を鍛える学習に重きを置いた経験重視型の教育方針で、学習時間と内容を減らしてゆとりある学校を目指した教育であった。詰め込み教育は、知識の暗記を重視したため、「なぜそうなるのか」といった疑問や創造力の欠如が問題視され、高度で過密な教科書内容と新幹線授業と呼ばれるほどの早い速度の授業により落ちこぼれを増加させてしまう結果となった。またこのような教育で詰め込まれた知識は試験が終わると忘れてしまう「剥落学力」であるという指摘もあったという。(参考文献13)

ただ、「思考力を鍛える学習」をするのに豊富な知的背景が必要なことぐらいは一寸考えれば直ぐ分かることである。授業による拘束時間が減らされたのは、その空いた時間を豊富な知的背景の学習に使うためであって、空き時間を単なる遊び、ましてや非行やいじめなどに使うためではないということぐらいは皆分かっていた筈である。教員と親を含む一般市民はこの点についてもっと慎重に考慮するべきであったと、いまにしてつくづく思う。特に、レベルの高い生徒を除いた一般の生徒の理解とその実行についての認識が少し甘すぎたと思うと残念でならない。

今回のフォーラムでも高校生の一人が「データをとりそれについて発表する授業であったので、自分の意見を言うことが出来ないことがあった」と言っている。「自分の意見を言うことが出来なかった」のが遠慮によるものか、あるいは不勉強に起因する無理解によるものかは別として、親と一般市民は、学校のこと・教育のことは先生に任せて置こうという考えをこの際きっぱり捨てて、先生と一緒に力を合わせて、日本のため世界のために頑張ろうという決意を新たにさせていただきたいと切に望む次第である。

なお、この点に関係して、「この豊中 RC の教育フォーラムでは教育に関していろいろな意見が出るがそれに従って何を実行するのが良いかという実施案はほとんど示されないので、参加者にとってはあまり役に立ちません」という意見が高校教員からでた。この提言についての詳細な議論は行われなかったが、発言の真意が「フォーラム参加者が今後どう行動するべきかを決めて欲しい」ということであれば、少々の外れの意見ではなかろうかと思う。この教育フォーラムで議論し明確にするのは物事の根本原理であって、それを頭に入れて如何に行動するかは参加者本人の決めるべきことだと思うからである。自分の進むべき道は、他人のいろいろな考え方を十分に参考にしつつ、最終的には自分で決めていただきたいと強く願うものである。

学習指導要領の改訂版には教育の理念が「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしなが、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」と書かれており、具体的な教育課程としては、「社会に開かれた教育課程」と題して下記の三つが示されている。すなわち、

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと、
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと、
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること、である。

これはフォーラムに参加した高校教員の話であるが、「自分の小学校4年生の孫は英検準2級に合格しており、本当に小学校4年生かと思うような会話もできるのですが、今習っている程度の算数の問題を解かせるとかなり間違えます。誰にも得手・不得手はあるし、教科の好き嫌いもあります。食わず嫌い、という言葉があるように、嫌いだと勝手に思い込んでいたことが、実際にやってみると興味が湧いてきて能力も上がってくることもあります。子供たちを学校の外の社会にも連れ出して視野を広げる機会を与えるのも教育の大事な役目の一つではないかと思っています」、ということであった。学校教育を通じてよりよい社会を創るという学習指導要領改訂版の目標を学校と社会とが共有することの重要性を示す提案である。

また、幼児教育に関することであるが、幼稚園の子どもたちに太陽の絵を描かせたところ、緑の太陽を

書いた子がいたという。これをどんな風に認識するかは少し難しい問題であるが、想像力をかきたてるきっかけとなるものを周りが理解し、子どもの発想を抑圧しない工夫が必要であろう。これは原理的にはとても大事なことである。

学習指導要領改訂版の主体的・対話的で深い学びの実現(アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善)の項には「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすること、というアクティブ・ラーニングの説明の後に、下記のような詳細説明が記されている

【主体的な学び】学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

【対話的な学び】子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【深い学び】習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

ここに示されているアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の心は一般市民の日常生活の中でも十分に生かして欲しいと強く思う次第であるである。(参考文献14)

3.4 日本は神仏分離の国で戦前の昭和天皇は神であると教えられた

この節の内容は、井上暎夫バスターガバナーのフォーラムでの話が中心になっている。

日本は明治以来、神仏分離の国である。神仏分離とは神と仏が別々に存在するというので、神社とお寺が同じ場所に存在することはあり得ない。しかしながら、一般家庭では仏壇の横に神棚があることは珍しくはない。仏間の隣の部屋に神棚がある家はかなりある。仏壇にはお花を供え、神棚には榊を供える。これは子供の時からいまに至るまで、筆者畑田の家では私の役目である。未だ息子に引き継いでいない。

歴史を振り返ってみると、明治以前の日本では、天皇が神道ではなく仏教を信仰してきたことは明らかである。明治になってから天皇が皇居の宮中三殿で宮中祭祀を営むようになったが、戦後の新憲法のもとでは宮中祭祀は公的な性格を失い、天皇家の私的行為と見なされている。それならば、天皇の信仰は神道かというところ、これには若干疑問が残る。神社は国民のほとんど約9000万人が神道の信者であると認識している。ところが、世論調査で信仰を聞くと、神道の信者と答える日本人は全体の2%程度にしかならないという。各神社の氏子として捉えられてはいるが、国民は神道を信仰している自覚はないということである。また、キリスト教や仏教とは異なり、創唱者がおらず教典も存在しない神道を宗教として捉えていいのかという問題もある。そうすると、天皇が日常的に宮中祭祀を営んでいるからといって、天皇の信仰は神道であるとは言い切れないことになる。

戦争中、小学校で日本は神の国であると教わった。大東亜戦争は神の御心による戦いすなわち聖戦である。神は常に正しい。したがって神の御心、神の思し召しによる戦いに負けるはずはない。そしてその神は天皇であった。教育勅語は神のお言葉として丸暗記することを命じられ、その成果は担任教員の前で一人ずつ発表させられて、一言一句正確に言えるようになるまで家に帰してもらえなかった。教育勅語には

なかなか良いことが書かれていたので、その暗記は、神の思し召しかどうかは別にして、教育的に無意味なことではなかったが、丸暗記の苦手な生徒にとっては大きな苦痛であったに違いない。「……………爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン……………明治二十三年十月三十日 御名御璽」

その神であった天皇が戦後人間になられた。中学校で憲法第一条「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴であつて、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基く」を教えられた時は本当に嬉しかった。今後歴代の天皇はこの条文の趣旨を慎重に熟慮のうえ、その難しい役目を立派に全うされることをこい願うものである。

4 道徳の本質を考える—企業活動と教育活動を通して—

4.1 道徳って何？ その答えは

道徳って何？という問いに対する道徳の根本原理に基づく正解は、3.1 節に詳述したように「道徳的能力の根本は人間が自分以外の人や自然に対してどう振る舞うべきかを考える力、すなわち想像力」であるという答えであったとしても、社会を構成する各個人や企業などの組織あるいはそれらの組織に属する個人の道徳に対する考え方は少しずつ違うのが普通である。それが道徳の自然な姿である。状況はどのような分野でも同じである。道徳に対する考えは多様であるともいえる。それだからこそこの道徳に関するフォーラムが5年も続いてきたのだと思う。このような議論・討論の場が市民社会にどんどんと広がっていくことを期待している。「道徳って何？」は人類の永遠のテーマの一つなのである。

何故、市民社会への議論・討論の場の広がりを目指すのか、それは企業や学校での道徳活動・授業ははっきり言えば少し生ぬるいからである。例えば、差別が良くないのは明らかである。駄目だとわかっていることを掘り起こして、差別を無くさねばならないと訴えるのが道徳の授業の筈である。ところが実際は、「差別をなくすにはどうすればよいのか」というところに真剣に向き合い、焦点を絞って強力に切り込むことはしません。その一歩手前で止めているという感じです」ということである。これは大阪教育大学付属小学校の出身で長年同校の教諭を務めた参加者の意見である。

高校生の一人が「会社ではかなりの女性差別があるという話を聞いています。その話が本当かどうかは別としても、いま私たちが受けているような内容の道徳の授業を、それを受けていない企業の人たちに受けてもらった方がよいのではないかと日頃から思っています」と言った。女性差別はなぜ良くないのかを道徳の立場から理解してもらうのは大事なことだと思う。もう一つ大事なことは、女性差別の問題の解決は、男女が平等にことに当たらねばならないということである。

4.2 これからの企業道徳—企業は社会に対して如何に道徳的であるべきか

企業の道徳は企業の業績に直接つながるものである。企業が成した行為がその先の先まで、例えば、もの作りの会社であれば、自社の製品が市民社会で使われた後それが廃棄され、どのような道をたどっているか、そういうところまで考えるのが、これからの企業道徳なのだ強く思う。

企業の構成員一人一人の道徳と組織としての企業の道徳とは異なることが多く、一般社会に対する影響は後者の方が大きいように思う。企業の道徳に対する考え方は、それが儲けにつながるかどうか左右される。組織としての企業が、そしてその中の個々の構成員が、いくら道徳的に素晴らしいことだと思っ

も、儲けに繋がらないものは採用できないことが多いのではなからうか。

企業の道德レベルを上げれば上げるほど儲けも向上するというのは企業道德の理想ではあるが、実際にはあまりないケースで、道德性を向上させると儲けの方は低下するというのが通常の姿であろう。この両者のせめぎ合いをどこで折り合いをつけるか、落としどころの難しさの解決が企業の社会性・社会的評価を決めるのである。

「道德とはいかにして快適な人間関係を保つかというルールである」とは企業の責任者が社員に向かってよく言うことのようにである。企業内の人間関係が快適でなければ、社会における企業の外の人たちとの関わりの中でその企業が道德的に振る舞うことは困難である。たとえば、どこまでが指導でどこからがハラスメントになるかといった企業内の人間関係の問題についても、指導者による想像力を駆使した十分な検討がなされなければならない。4.1 節の冒頭でも述べたように、「道德的能力の根本は人間が自分以外の人や自然に対してどう振る舞うべきかを考える力、すなわち想像力である」。この道德の根本原理を企業の道德的能力に当てはめれば、企業の外の人たちを対象とする人間関係において、企業の個々の構成員は、企業が主張する道德の範囲内で、人と自然で構成される社会と快適・良好な関係を作って生きていかねばならないことを忘れないで欲しいと思う。これを忘れると社会から遊離した存在になってしまう可能性がある。

4.3 大人の道德の基礎となる子供の道德と子育て

大人の道德の基礎となる子供の道德をここで少し論じておきたい。昔は子ども時代に子どもたちだけでワイワイと話す機会があった。お山の大将みたいなのがいて、これはここまでだ、これ以上しては相手が本当に傷つくという様な判断をした。ことの限界を判断する想像力が作用したのである。今はこういう想像力のはたらきが欠如しているように思う。それで陰湿ないじめが起る。母親や父親が、子どもが寝る前には本を読み聞かせるような習慣もなくなった。この習慣は先生による教育の支援だけではなく、先程問題になった読解力の向上にもある程度は役立っていたと思う。3 世代が同居している場合、皆が揃って食事をするというような祖父母・両親・子どもが一緒になって話ができるというような時間が長く取れた。外に出れば、隣組という組織があって、どこそこのおうちには誰々がいてどういうことをしておられる、というようなことがよく分かった。そして、自分と同年配の子ども達と一緒に遊んで、そこで、いろいろな遊びを覚えていくなかで、教育・道德的な問題も自然と分かりながら大きくなっていった。ところが今はそういう隣組に代わって、「隣は何する人ぞ」の時代になってしまっていて、マンションの隣の人たちとも仲良くするという精神が生まれ難い。さらに、教育さえも先生や先輩・友達から1つ1つ教えてもらうということは殆ど無くなって、テレビ、ラジオ、新聞が先生の代わりをして手っ取り早く教えてくれるようになってしまった。核家族化は進む、少子高齢化は進む、そういうことになってくると、本当に、人から人へと直接教えてもらい、それを学びとるといふ学びの場は減っていくのである。

親にとって子どもの世話が大変なのはよく分かる。しかしこれは、スマホに任せられる問題でないこともまた直ぐに分かっていただけだと思う。子どもにスマホを持たせておけば解決する問題ではない。家庭内の人間関係も家庭内道德に深く関わっている。子供の教育、特に幼児教育をスマホに任せようことは断じて行ってはならない。スマホは道德的能力の根源である想像力の養成も殆ど行ってくれない。ではどうすればよいのか。戦前・戦中派として生まれた人間から見る教育・道德と、戦後生まれの人たちの教育・道德とはかなり異なる。そして、それを受けつぐ子ども達の道德観は、全然違うかもしれない。そこまでを深く考えないと、教育問題、それから道德の問題の解決は難しいのではなからうか。幼児と子供の教育・

道徳をもっと真剣に考えようでないか。

そのための参考に、夫の転勤で4歳の子供を連れてヨーロッパに渡って長く生活し、今その時の子どもの4歳の子どもすなわち4歳の孫と相対している女性のお話を記しておく。「私は、4歳の息子を連れてイギリスの田舎に行きました。いきなり全く知らないところに放り出されても、子供にとっては、木の枝1つ、水たまり1つ、砂場1つ、全ておもちゃになります。そこから想像力を働かせて、いろんなものを湧きたたせることが出来ます。友達を作る能力とか、日本語しか話せなかったのに、英語を話そうとする努力とか、そういう、4歳の子を見て子どもって遅いなと思いました。今、孫が丁度4歳なのですが、非常に恵まれていて、ちょっと手を伸ばせばゲームでもなんでもあるし、コンビニエンスストアに行けばなんでも買えます。息子の4歳のときと比べると、あまりにも環境が違います。想像力など働かせようもないし、なんでも自分、自分で、協調性がありません。というよりは、協調性など不必要なのかもしれません。最近そんなことをすごく感じるのです」ということである。我々大人は今、人間が生きていくうえで非常に大事な道徳あるいは道徳的思考の根幹の力である想像力を養う機会を子どもたちから奪ってしまうという大きな間違いを犯しているのではなかろうか。

3.3節に述べた幼稚園の写生大会で一人の子どもが緑色の太陽を描いたという話であるが、これを、「そんな色の太陽なんかあり得ないよ。書き直しなさい」と言うのは大人の常識であって、子どもには適用して欲しくない言い草である。子供にはこんな世界に入って欲しくないのである。子供はもっと想像力に満ち溢れた自由な世界で遅く生きて欲しい。「若し太陽の光が緑だったらどんな世界になるのだろうか」と想像をめぐらすのは楽しいと思うし、それに対して「私はやっぱり太陽は赤がいいと思うよ」と子ども同士で言い合うのも面白かろう。そしてこんな議論に大人が子供にかえって参加する社会を作ることが出来れば、新しい日本の誕生に繋がるのではなかろうか、と思う。

4.4 学校教育と道徳

3.1節の最初の段落と最後から上に三つ目の段落にそれぞれ述べられている「文科省が小学校に『道徳』の必修科目1単位をつくり、道徳の授業をこの科目の中だけでなく全教科の中で行うことを指示したのはまさに『先見の明』というべきである」と「道徳を含めてあらゆる授業の根本の力は想像力です。一所懸命勉強して想像力を高めてください」は、教員・保護者はもとより、学校教育に関わる全ての人々が常に念頭に置いて、意識して欲しいことである。次々に生じる、日々の眼前の課題への対処に埋没してしまい、この重要な点が意識されなくなってしまうがちなことは、このフォーラムの出席者の一人の「数学の授業で道徳のことにかまけては生徒の親達から『授業が進まんのどうしてくれんねん。子供らの進路をどう考えてんねん』って、文句が出るやろうと思います」という発言に現れている。文科省の『先見の明』は、算数・数学の授業を一所懸命に行って道徳の根本の力でもある想像力を生徒たちに養わせてほしいと言っているのであって、算数・数学の授業の一部を道徳の授業に使うって欲しいなどとは一言も言っていない。このことは、3.1および3.2節をお読みいただければ明らかではあるが、本4.4節のはじめにあらためて強調しておきたいと思う。

先に4.2節に述べた企業の道徳の場合は道徳性を向上させると儲けの方は低下するという問題があった。ただここでは社員は会社の方針に従っておればよいわけで、教育現場の教員のような多様性は求められない。会社の社員と学校の教員との大きな違いである。ここで、会社の社員に対する企業の経営者に相当するのは、教員に対しては教育委員会である。そして教育委員会の後ろには市民がいる。またしても、市民の使命と責任の重要性が問題となる。

ここで企業内でのハラスメントに関連して、先に新聞報道された学校内での教職員間のハラスメント、すなわち激辛カレーを同僚に無理やり食べさせたという事件の話も出て、こんなことが起こるのは学校職員室が閉鎖的な空間である故だという主張がロータリー会員からなされたが、これはあまりにも現場を知らない人の意見で、今の職員室にはそんな雰囲気は殆どないというのが高校教員参加者の意見であった。あの事件が大々的に報じられたのは、日ごろ滅多に起こらないことであったからだと筆者は思っている。

それよりも心配なことは、昨今、授業評価が公式に行われるようになって、本来多様であるべき個々の教員の授業の多様性がものすごい勢いで失われているということである。このカレー事件が起こった職場ではひょっとすると、先生の多様性がまったく許されず、そのなかで溜まった先生方のストレスが、弱いところにはけ口を求めた結果ではないかとも思われるのである。教室で起こっている児童生徒のいじめもよく似た構図である。「学校によっていろいろ状況が違って、分かりやすく表現するのは難しいのですが、規則が厳しくて、生徒にストレスがかかって、それがいじめの原因になることはよくあることです。躰の厳しい家のお子さんにストレスがかかっていじめが始まるというのも、同じです。それが職員室のなかで起こってしまうと、激辛カレー事件のようなことになるかもしれないというのが私の想像です」、というのが参加者の中の一人の高校教員の意見であった。

道徳というのは人間関係をどのようにして良好に保つかに関わることであり、これは企業と社会の間の人間関係だけでなく企業内の人間関係にも深く関わっている。セクハラ、パワハラなどの企業内ハラスメント(参考文献 15)は企業内道徳低下の典型例で、これはこれ以上やってはいけない、ここで止めなければいけない、という力の欠如の結果と言わざるをえない。上記の神戸の小学校での先生間のいじめ問題も企業内ハラスメントと同様の現象という解釈もできる。

4.5 広範囲の知識・経験をもって時代を担う若者の養成

市民は生きている限りは知的好奇心を持って学習の努力を続けるべしという話が、手を変え、品を変えて出て来るのであるが、オランダの留学生から「教科書を勉強して、その中身を覚えて、試験を受けて、終わり、という今の大学の授業は全く意味がありません。試験勉強の成果は試験が済めばきれいに忘れてしまい、必要な時にはまたパソコンかスマホを使って調べ直すことになります。小さな子供の場合とはともかく、大学の授業は、自分で問題を見つけ、自分で解決方法を探して、レポートを作って、それを皆の前で発表する様な方式の授業にした方が良くと思います」という意見が出た。大学院、特にこのような訓練があまり行われていないように見受けられる文科系の大学院では試してみる価値のある提案と思ったが、文科系の先輩から反論が出た。「そのような方法だけでは学習に偏りの出る恐れがあります。パソコンやスマホは分野の全体を俯瞰するのが苦手です。全体は教科書で、特定の分野の詳細はパソコン・スマホでというのが良いと思います。特に最近、若者に非常に広い範囲の知識・経験が要求される時代に入りつつあります。さらに言えば、いくら素晴らしい文章がパソコンやスマホから出てきてもそれを正しく理解する基礎知識を持ち合わせなければ、その検索は何の意味もありません。このことを忘れてはなりません」と。まさにその通りである。

ここで頭に浮かぶ大きな心配事は、このような社会的要求に応えられる若者の養成に小・中・高等学校の先生方が何処まで対応できるか、そして子どもの親が先生を何処まで支援、あるいは協力できる能力を持っているかということである。心配事が減ることはない。極論すればパソコン・スマホの答えが英語でしか表示されなかったら、英語の読めない人は理解できないのである。

4.6 親と子供の対話

企業と道徳を語るに当たっては問題の企業を一般人が外から見た場合の意見を知ることでも大事である。高校生の一人が、ある会社に行く機会があつて面白かつたので母に言ったところ、「あの会社に入社した人は長続きしていないよ」と言われたという。どんどん業績を残さないと直ぐに契約を切られてしまう、というのである。母親の子どもを思う一言なのであろう。この母の言葉を聞いた子供は、道徳的で正しい意見でも、それが万人受けする意見でなければ、社内では通らないことがある、ということに気づき、ひょっとすると大部分の会社が、そうではないのかという疑念にとらわれるようになったという。

家庭での子供の躰に関して、こんな話があつた。「地下鉄に乗っていたときに信号か何かの事情で電車が急に止まりました。すると、向かいの席に母親と一緒に坐っていた子供が、『何故こんなところで止まったの?』と母親に聞きました。その母親は『きっと向こうでまた土掘っているのよ』と応えたというのです。子供はそれを聞いて『ふうん』と言って、いろいろ考えている風でした。たぶん子供はいろんなことを想像していたのであろうと思います。こんな応えをとっさに言えるお母さんは偉いなあ、多分このお母さんは普段から子供にこういう教育をしておられるのだろう、と思いました。中学生のときの経験ですが、今でもはっきりと覚えている光景です」と。これは高校教員の参加者のお話である。この高校の先生の中学生の時に車内で聞いた母と子の会話の意味についての解釈に多少の疑義はあるとはいえ、こういうことを深く心に刻んでおられることの意義は大きいように思う。

5 社会における道徳的能力の養成

人は生まれて間もなく道徳と関わり合うことになる。物心づくにつれて自分以外の人や自然などに関わらざるを得なくなるからである。その関わりの中でいろいろなことを知り、それについて考え、道徳的能力の根源である想像力を成長させていく。それに支えられ助けられて道徳は生きもののように成長するのである。子どもの道徳は大人の道徳とは違う、それは道徳の根源の力である想像力は歳とともに成長し変化しているからである。子どもの道徳と想像力は 4.3 節でも議論したところであるが、大人は教育を受けることで、様々な知識を得て、その道徳・想像力を進化・深化させ、その人間独自の文化・文明の発展あるいは創出につないでいくのである。そしてこの文化・文明の発展あるいは創出はこれに関わる道徳とその根源の力である想像力の変化・成長につながっていく。これは道徳に関わる重要な循環過程である。子どもの道徳に関わる者はこのことは忘れないで欲しい。

「日本が戦争に負けた後、欧米の道徳の影響が強くなって、アメリカではこんな風になっているよ、だから日本のこういうやり方はよくないのではないか、というようなことを言われることが、結構、多くなったような気がします」とは耳鼻咽喉科のお医者さんの意見である。このようなことは抗生物質の使い方や患者に対する接し方などの医療の面でも起こっていて、抗生物質の使用はなるべく控えましょう、という意見も出るのであるが、日本人の平均余命が非常に高く長生きで、乳幼児の死亡率が低いのは抗生物質のおかげとも理解できると彼は言う。この先生は終戦の 10 年以上後のお生まれであるが、戦前・戦中・戦後を生きて 86 歳に近づいている筆者にとっても、本当にその通りだと思えるのである。

この先生はさらに、筆者が編集した「双方向授業が拓く日本の教育」をお読みいただいたうえで、「先生が生徒に一方的に教えるのでなくて、お互いに双方向的に議論する授業は、それはそれで素晴らしいものだと思いますが、やはり大事なことは日本が昔からやってきた『読み書きそろばん』です」と述べておられる。これもまさにその通りであつて、本文の 3.3 節に「思考力を鍛える学習をするのに豊富な知的背景が必要であり、授業による拘束時間が減らされたのは、その空いた時間を豊富な知的背景の学習に使

うためであって、空き時間を作って生徒を遊ばせるためではない」ことを述べているところである。この双方向授業の本の前書きに「民主主義の大前提は国民皆学（みなががく）の精神であって市民の能動的学習を欠いた社会では民主主義は成り立たず国家の存続が危うくなる、という意味のことが記されている。またしても、市民の使命と責任感をもってのご努力をお願いすることになってしまった。

道徳的能力を育てる場の最小単位は家であり家族である。昔の子どもは祖父母、両親、兄弟と一緒に住んでいた。いわゆる大家族である。筆者畑田は独り子で兄弟が無く、大東亜戦争の4年間は父親が内地勤務ではあったが陸軍の兵隊として働いていたので少々寂しい思いをしていた。たまたま父親が外泊で帰宅すると皆で食事をするのが大変うれしかったのを今でもよく覚えている。4.3節に述べたように、敵機の襲来などに備える意味もあって隣組（現在の自治会）を通しての近所付き合いも強固で、毎日の生活が道徳的能力養成の絶好の場であった。子どもたちにも隣組ごとの学年を超えた班編成がなされていて、学校への行き帰りや敵機空襲の警戒警報発令の時の避難などのための移動は、この班単位で行われた。この班内では必然的に年上の生徒が年下の生徒の面倒みることになり、生徒の道徳的能力の養成にも役立っていたように思う。少子高齢化が進んだ今、近所付き合いはどんどん薄くなってしまった。せめて親子一緒に食事ぐらいは続けて欲しいと思うが、これも子供の塾通いでままならないというのが実状らしい。何とかできないものであろうか。

上記のお話は、戦争中のような、ある程度のストレスがかかり、自分の思うままにはならないような場・社会の方が道徳的能力の養成が行いやすいことを示しているようにも思われる。道徳的能力の養成、あるいは一般論でいえば教育の世界にある程度のストレスが必要なことは間違いなさそうである。そのストレスを自分で自分自身に掛けられる人はそんなに多くはないことを教育者は忘れてはならない。なお、狭い世界でストレスを感じ続けながら生活しているといじめのような非道徳的な事態が発生することがある。また、きびしい家庭に育った子どもはストレスでいじめになる可能性があるという。「いじめ」の問題は4.4節でも述べたところであるが、こんなことだけは引き起こさないように努力して欲しいと思う。

ところで、戦後の日本の民主主義教育はそんなにおかしなものではないと筆者は思っている。もしそれが日本の将来を危うくするような結果を招くに至ったとしたら、それは教育方針の誤りではなく運用の仕方が悪かったというべきであろう。すなわち国民の責任である。「今の教育ではだめだ、戦前に戻そう」という人もいる。確かに筆者が小学校1年から4年まで受けた戦前の教育も大東亜戦争に関わる部分を除けばそんなにおかしなものではなかった。大事なことは、教育を行うものが、教育システムの根本精神・根本原理をよく理解し、他からの雑音に惑わされることなしに、日本のため世界のために行動する国民に育つ覚悟を持つことのできる日本人を育てることである。そして国民はそれに応えることを使命と責務と考えねばならないのである。

6 フォーラムを終えるに当たって

フォーラムを終えるに当たり井上暎夫（よしの）パストガバナーから、下記のような感想をいただいた。

AIの技術が進むと単純な仕事はAIに取って代わられる可能性は高いが、AIが人間に対する先生に代わることはない。世の中には人間にしかできないことがある。このフォーラムで何回も出てくる想像力、この想像力を働かせてことを行うのは人間の役割だと思う。いろいろな法律や制度を新しく作ったり変えたりするのも人間にしかできない。自分の仕事もただ与えられて、すなわち誰かに指示されて言われたとおりにするのではなくて、自分がどういうことをしたいのか、自分が将来どういうことをして世間に役立ちたいのかを自分が想像力を働かせて考え、実行しておれば、人間がAIにとって代わられることなど起こら

ない、と然る先生が本に書いておられた。

私自身のことを考えると、これは自分が望んだことではないが、日本国に生まれた。最初に出会った他人は家族、先ず家族との関わりが生まれ、大きくなって学校へ行って先生や他の生徒と関わり合うようになり、それから町の人々との関わり合いができ、関わり合いの範囲が少しずつ大きくなって、都道府県、国、さらには世界へと広がり、また深まって行った。職場における周囲の人たちとの関わり、人間関係を如何に結ぶかはたいへん重要なことである。これが社会との関わりに繋がり、さらに大きく深まって日本の国そして世界とのつながりに発展する。この人間との関わり合いの拡大・深化が自分を成長させてくれる。その成長にしたがって関わり合いの範囲もまたさらなる拡大・深化を遂げる。この繰り返しの過程が道徳と深く関わっているのだと思う。

世の中には法律というものがあって、法律で禁じられていることをすると罰せられる。では、法律が禁じていないことは、全てしてもよいのか。私はそうは思わない。それ以外にやはり人間として守らなければならない基本的なものがあると思う。それがどんなものかは、自分が生まれた、あるいは育った過程を通して、少しずつ会得していくものだと思っている。ただ、時代は少しずつ、しかし確実に変わっていく。私自身も嘗ては、おじいちゃん、おばあちゃんと両親のいる 3 世代家庭で育った。しかし、今の私の代になってからはそうではなくて、全く別々に暮らしている。そういうなかで、今までの家が担ってきた、祖父母からの伝承をどういうふうに行えばよいのかということになる。子育て問題では、私の時代は親が全面的に育ててきた。しかしながら、女性の社会進出、女性も働く時代になって、子供を保育園で育てる人たちが多くなってきた。そうすると、保育園、幼稚園、小・中・高等学校が、特に子供が保育園、幼稚園、小学校の生徒であるような場合に、どのような役割を果たすのが良いのかが問題になってくる。ここでもまた、当事者と一般市民が行政や政治関係の人たちと一緒にあって一所懸命に知恵を絞り問題解決に立ち向かうことが必要になってくる。

こういう難問解決の時に考慮した方がよいのは、日本の国には昔から人から人へと伝承されてきた仕来り、習俗のようなもの、いわゆる生活様式があって、これを上手に活用すると意外にうまくいくということである。こういうことが日本の道徳の根底を流れているのではないだろうか。難問解決のためには、法律に反していなければ何をしてもよいとは勿論言わないが、人や場所や時期などの違いによる結論の多様性を認めることが、良好な人間関係を確立するうえでは極めて重要である。特化型 AI は、今問題になっている事象の内容を人間が頭で考えるようにして理解したうえで結論を出すのではなくて、自分が持っている大量のデータの中のどれに一番類似しているかによって答えを出している。この AI の働きの根本原理をよく理解したうえで AI を活用せねばならない。

このような AI 化時代においては、上に述べた社会における人間関係、最小単位の家族から学校、村、町、都道府県、国、世界、あるいは職場において周囲の人たちとどのようにかかわっていくのかという人間関係を如何に結んでいくかが、従来にも増して重要になってくる。

時代は変わる。それに応じて日本政府の役割も変わる。日本には日本のやり方があるはずである。それを通して世界のお役に立つのが日本の役目である。日本は世界の多様性の一端を担わねばならない。

ところで、**四つのテスト**は、今日のフォーラムではあまり議論の対象にならなかったが、シカゴ RC のハーバート J. テイラーが破産寸前の会社の再建のために、1932年に作った従業員のための倫理指針であることはよく知られている。その内容は、次の通りである。

<四つのテスト>

言行は以下のことに照らしてから行うべし

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

<The Four-Way Test>

Of the things we think, say or do

- Is it the TRUTH ?
Is it FAIR to all concerned ?
Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP ?
Will it be BENEFICIAL to all concerned ?

この会社は調理器具を作るところであったが、広告文に「世界一品質がよい」と書いてある。テイラーはこれを見て、「これ事実かな？」と思う訳である。ここから生み出されたのが「真実かどうか」である。このようにしてテイラーは、いろいろと考えた末、最終的に、「4 項目の倫理指針」を作り、この指針が社員の信ずるいくつかの宗教の教義のどれにも反しないことを確かめたうえで、これを基にして会社の再生を果たしたのである。この話を聞いた同じロータリークラブの会員が、これをロータリーで使いたいと言い出す。つまり、ロータリアンは殆ど全て職業人である。なんらかの職業を持っている。そういう人たちの倫理行動の指針としてこれを使おうという訳である。社会で職業人として仕事をするとき、先ずこれに照らして今から行おうとしていることに問題がないということを確認してから実行すべし、ということで「四つのテスト」と命名されたのである。

四つのテストができる前に、シカゴ RC 会員のアーサー・シェルドンという人が、「企業は仕入先と取り引きする、あるいは、下請けにいろいろなことをしてもらい、これらの相手方に利益を与えないと持続性はない。つまり、自分だけが儲けても相手がいつも損ばかりしているような取引は長く続かない。取引を継続するためには、相手のことをまず考えなければならない」ということを考え付いた。1950 年のデトロイト国際大会で承認された、ロータリーの標語「**He profits most who serves his fellows best.** 最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」の基になる考えである。シェルドンは経営学校を経営していて、学校でこういうことを生徒に教えていたのである。

今度、令和 4 年から発行される予定の新しい 1 万円札の肖像図柄が渋沢栄一さんの肖像に変わるが、この人は明治で大変活躍した事業家である。彼は「右手にそろばん、左手に論語」と言ったそうで、事業活動をするには、そろばんだけでは駄目だよ、そろばんと同等に論語、すなわち社会のルールというものも考えないといけないと言っているのである。彼は、非常に多くの社会奉仕活動を実行し、奉仕団体も作っている。聖路加病院も彼が作ったものである。彼はロータリーができる前から、「右手にそろばん、左手に論語」とロータリーの職業奉仕の理念を主張していたわけである。

ロータリーの四つのテストは、世界のどこの会社でも通用するものかどうか、また日本の企業ではどれくらい活用されているのか、一度機会があれば議論してみても如何であろうか、と思っている。(参考文献 16、17) 四つのテストは印刷物として、ロータリアンの職場はもとより一般の会社にも配布されたようである。同じようなことは国際ロータリー加盟の世界のロータリーでも行われたと思う。テイラーは「日本は、全世界に先かけてこのテストを実際につかった」といっている。四つのテストをクラブのバナーに最初にのせたのは大阪ロータリークラブであった (1954 年)。学校の教室に四つのテストのポスターを貼ってくれたのは日本では福岡県の門司ロータリークラブが初めてで、たぶん世界でも初めてであろう。門司の町では、病院や駅、工場などにも四つのテストが掲げられていたということである (参考文献 18、19) 当地区で町の駅に置き傘を置いたことがあるのだが、借りた傘が返却されることを願って、全部の傘に 4 つのテストを書き込んだという。4 つのテストがこんな風に使われたのも、これが最初と思われる。

井上パストガバナーは発言の最後を次のような言葉で締めくくられた。「今日、いろいろ皆さん方のご意見を聞きまして、やはり多様性ということが本当に大事だというふうに思いました。つまり、個人、個人は皆が同じではなくて違う、それぞれ育った場所も環境もいろいろで違います。国も違うし、国の成り立ちも違うし、考え方も違うのです。たとえば、日本は、昔は倫理観の基礎に論語すなわち孔子の考え方がありました。西洋には聖書があるし、イスラム教の場合はコーランがあります。そういうものがものの考え方の土台になっていたわけですから、それを全て捨てて一緒にしろということとは不可能なのです。ですから相手が考えていることをよく理解して、その上でいかに付き合っていかなければならないのかと考えるのが道徳ではないかと私は思います。ただ大事なことはこのような道徳的思考は時代と共に少しずつ変化していくということです。例えばAIがわれわれの生活にかなり頻繁に活用されるようになってきました。これが、どのように自分たちの今の仕事に、あるいは将来に影響するかということについても、道徳的な観点からの対応が必要になってきていると思っています。このフォーラムにご参加いただいた皆様方のご協力、本当に感謝しておりますし、私自身も嬉しく思っております。有難うございました」。

最後に行動特性(Competence コンピテンス)が少し話題になった。これは優れた成果を生み出す人が行っている特徴的な行動パターンのことである。1990年代にアメリカで人事採用の場に取り入れられ、近年、日本でも話題になっている。実施した行動の成果よりもそれに到る過程の行動パターンを問題視する考え方である。出来れば将来の教育フォーラムの話題の一つにしようということになった。

いわゆる世の中に出ると、酷いじめは論外としても、ある程度のいじめに似た環境に置かれることは時々ある。さかなくん(東京海洋大客員助教授)が朝日新聞に書いていた話であるが、「メジナという魚を水槽のなかにたくさん入れて飼っていると、その中の1匹を皆がいじめ始めるといいます。いじめられている魚をほかの水槽に移すと、また違う魚を標的にしていじめ始めるそうです。メジナも元々の居場所の広い海に放してやると、みんなで仲良く列を作って泳いでいるそうです。狭い世界でいろいろなストレスを受けながら社会生活を送っていると、いじめが出てくるのではないのでしょうか。広い世界で、ストレスフリー、すなわちストレスの無い状態であれば、いじめの問題は自然に直っていくのではないかな、と思うのですが。それが達成されるには、日本の人口密度は高すぎるのでしょうか」と。

生徒たちに劇をやらせてコンピテンスを体験させ、いじめ問題を解決しようという試みが高校で試行されている。いじめる子といじめられる子の両方の役割を全ての子どもに演じさせる授業、つまり、コンピテンスを体験させる授業である。いじめっ子の役を実際にいじめられている子が演じ、いじめられっ子の役をいじめっ子が演じる。そういう脚本を子供たちで用意させ、それを演じさせることで、両方の気持ちがお互いに分かって、いじめが減ったというのである。いじめる子の気持ちがいじめられている子に、また、いじめられている子の気持ちがいじめている子に、初めて分かったというのである。こんな事例が少しずつ広がっていけば、ストレスフリーの世界の実現も夢ではない。

「ただ、人間社会に生きている以上、人は何らかの意味で水槽のなかで泳いでいる魚のような状況に置かれます。いくら状況は違っても必ず水槽の中になることになると思うのです。それではストレスフリーは単なる理想にしか過ぎず、実現はしません。では、どうすれば、ストレスフリーの理想の世界を夢ではなくて実現できるのか、学習指導要領の変更に伴って導入された総合的な探究の授業(3.2節参照)はそういうことをまじめに考える機会です。旧来の知識を蓄積する授業と並行して、車の両輪のように今静かに進行しています。いつの日かこのような授業の大きな成果が現れることを信じて」とは高校の先生の言で

ある。彼の理想がそんなに遠くない将来に然るべき管理職と組織の認識・信頼・承認を経て実現することをこい願うものである。

7 終わりに

今回は全出席者に発言してもらおう方針で話を進めた。こうすると、順番が後になった人は自分の言いたいことをすでに誰かが言ってしまう時に新しいことを言わねばならないという圧力がかかるとか、本来活発な討論をするつもりでなくて参加した人が発言を求められたときに気のない返事をして座を白けさせないかという心配もあって、この種のやり方はあまり良くないという意見があった。一方、自由発言の従来の方式では、ここは豊中 RC のあの人の意見を聞いてみたいなどと司会者が思っても会員外の参加者に未発言の人がたくさんおられるような状態の時には指名を遠慮するような傾向があったが、全員発言の今回はそのようなことがなく、会員外の参加者からは豊中 RC 会員の意見が随分参考になったという意見もいただいた。次回は両者の折衷でうまく乗り切れればと願っている。

来年の教育フォーラムは 2021 年 1 月 23 日（土）に「人工知能の利点と欠点を考える」を主題に行う予定である。多くの熱心な方々のご参加を期待している。

8 参考文献

- 1 畑田耕一、渋谷亘、関谷洋子 「小・中学校の道徳の授業の特別の教科化を考える- 速報」
(2016 年 2 月 25 日公開) <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/MoralEducationForumCommn.pdf>
- 2 畑田耕一 「学校教育における道徳を考える」
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/EducationForum20170121.pdf>
- 3 畑田耕一、澤木政光、村司辰朗、宮田幹二、井上暎夫、尾野光夫、篠原厚、矢野富美子 「日本社会と道徳」
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/EducationForum20180127.pdf>
- 4 畑田耕一、北山辰樹、井上暎夫、岡本博、武枝敏之、細川隆弘、渋谷亘、村司辰朗、尾野光夫 「AI と教育-道徳と四つのテストに照らして」
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/EducationForum20190126.pdf>
- 5 「AI が人の代わりに戦場へ! 軍事で活用が進む AI」 <https://ainow.ai/2020/01/27/182818/>
- 6 「AI の定義と開発経緯」
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10601000-Daijinkanboukouseikagakuka-Kouseikagakuka/0000148673.pdf>
- 7 「機械学習・深層学習・AI について」 <https://clonos.jp/knowledge/detail09/>
- 8 「人工知能と深層学習」 <https://www.optim.cloud/blog/ai/ai-deeplearning/>
- 9 「ディープラーニング (Deep Learning) とは? 【入門編】」 <https://leapmind.io/blog/2017/06/16/ディープラーニング%EF%BC%88deep-learning%EF%BC%89とは%EF%BC%9F【入門編】/>
- 10 畑田耕一、林 義久、渋谷 亘 「道徳的能力と想像力」(2009 年 2 月 5 日公開)
<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/dohtoku-sohzoh.pdf>
- 11 「新学習指導要領について」
http://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/021/921/291106siyouul.1.pdf

- 12 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 「総合的な探究の時間」 文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/1407196_21_1_1_2.pdf
- 13 「ゆとり教育」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ゆとり教育>
- 14 「新しい学習指導要領の考え方ー中央教育審議会における議論から改訂そして実施へー」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 15 「社内ハラスメントを無くしましょう！ 防止策まとめ」
<https://www.somu-lier.jp/column/harassment/>
- 16 「四つのテスト」 <https://www.rotary-no-tomo.jp/documents/4waytest.php>
- 17 「四つのテスト (ロータリー百科事典)」
<https://sites.google.com/site/rotary100jiten/rotari-no-kokoro-to-jissen/rotari-no-kokoro-to-jissen--2/11-yottsu-no-tesuto>
- 18 大久保 昇 「ロータリークラブ「奉仕の一世紀」(4) (1949～1970)」 RI2650 地区 2005～06 年度ガバナー月信 4 月号 https://rid2650.gr.jp/archives/2005/monthly/04_05.html
- 19 「四つのテストセミナー」 長崎ロータリークラブ四つのテスト委員会 1986 年 4 月
<https://www.rotary-bunko.gr.jp/pdf/R-201806/60-1.pdf>

2020 年 1 月 25 日教育フォーラム参加者 (敬称略 順不同)

岡本博(西宮市立西宮高等学校教諭)、田坂恵美子(大阪大学基礎工学部留学生相談室アドバイザー)、北本靖子(大阪市水道局)、矢野富美子(元大阪大学技術職員)、服部由希子(精神保健福祉士)、井上暎夫(国際ロータリー2660地区パストガバナー)、毛利晴彦(ダイキン工業株式会社)、北山辰樹(大阪大学名誉教授)、渋谷亘(兵庫県立豊岡高校教諭)、卓妍秀(大阪大学理学研究科国際交流センター)、Afshin Haghparast(大阪大学医学研究科未来医療開発センター特任研究員)、Enes Sekerei(大阪大学理学研究科篠原研究室留学生(オランダ・ライデンの応用科学大学校生))、佐藤尚弘(大阪大学理学研究科教授)、久保田拓鑑((株)コンセプト)、久保田将章(奈良県立畝傍高等学校2年)、尾野光男(元四天王寺学園教諭)、奈良真行(豊中市教育委員会事務局学校教育課主幹)、飾森宏(西宮市立西宮高等学校教諭)、大下紀子、正木杏奈、寺崎桃杏奈、中島美代(以上4名西宮高校生)、松宮ゆかり(豊中RC事務職員)

豊中ロータリークラブ会員

武枝敏之(薬局経営・薬剤師)、北村公一(皮膚科医)、木村正治(外科医)、澤木政光(内科医)、宮田幹二(大学理工系)、松山辰男(内科医、豊中 RC 会長)、村司辰朗(華道教授)、米田真(産婦人科医、豊中 RC 幹事)、小川佳伸(耳鼻咽喉科医)、原和永(電気機器販売業)、志水清紀(泌尿器科医)、畑田耕一(大学理工系、司会)